

フランス出張記（ISO/TC275 全体会議など）

国際戦略室

2023年10月12日にISO/TC275の全体会議がフランスで開催され、JSから2名が参加しました。

ISO（International Organization for Standardization：国際標準化機構）はスイスのジュネーブに本部を置く、電気・電子分野以外の国際規格*1)を開発・発行する非政府組織です。1947年に設立されたISOが開発した規格は、技術、製造、医療、農業など、幅広い産業や分野をカバーしています。

ISOには各分野の規格を実際に策定するTC（Technical Committee：専門委員会）が設置され、関連産業・学术界・政府などから専門家が集結し、実務レベルで規格策定に協力しています。TCは設立順に番号が付されますので、TC275は275番目に出来たTCです。ISOのHPによると、1947年に最初に設立されたTC1はネジ山（Screw Threads）、そして最新のTC323は循環型経済（Circular Economy）です。

2013年2月にフランス規格協会AFNORの提唱で発足したTC275のテーマは、「汚泥の回収、再生利用、処理及び廃棄」です。JSは、（一社）日本下水道施設業協会と共に、発足時よりTC275の国内審議団体として活動しています。

また、TC275にはさらに専門的なテーマを協議するWG（Working Group：作業グループ）が設置されています。各WGの名称と議長国は以下の通りです。日本はWG7で議長を務める他、WG5に専門家を派遣しており、積極的に参加しています。

WG	名称	コンピナ（議長）
WG 1	用語の定義 (Terminology)	カナダ
WG 2	評価方法 (Characterization methods)	フランス
WG 3	嫌気性消化 (Anaerobic digestion)	フランス
WG 4	土壌還元 (Land application)	カナダ
WG 5	熱操作 (Thermal processes)	フランス
WG 6	濃縮と脱水 (Thickening & dewatering)	イタリア
WG 7	無機物及び栄養塩類の回収 (Inorganics & nutrients recovery)	日本
WG 8	コミュニケーションおよび公共認識の管理 (Communication & management of public perception)	カナダ

9回目となる今回の全体会議では、各WGからの活動報告と、事務局から今後のTC275の活動方針についての提案がありました。

今回JSには、日本の国内審議委員会から出された汚泥性状検査についての要望を提出し、結果を持ち帰るというミッションがありました。最初はフランス語なまりの英語に面くらいましたが、次第に理解できるようになり、日本からの疑問にも丁寧な説明がありました。

コロナ以降オンライン会議に慣れ、それなりに便利さも享受してきましたが、この時ばかりは直接会って話す事のメリットを痛感しました。はるばる日本から参加した甲斐があったというものです。

出発前に行われた国内審議委員会では、ロビー活動の必要性まで話題となったため気が重かったのですが、TC275はテーマ自体がややニッチなせいも全体的にのんびりした雰囲気、それにも救われました。

さて、今回会議の会場となったAFNORは、フランスのサン・ドニというところにあります。ラグビー好きの方ならご存じかと思いますが、サン・ドニは、昨年のワールドカップで開幕戦や決勝など主要な10試合が開催された、8万人収容のフランス国内最大のスタジアム、スタッド・ド・フランス（写真1）を擁する、パリ郊外の工業都市です。

今回10月にフランスで会議と聞いて、ワールドカップの時期だからフライトもホテルも取れないのではないかと危ぶんでいましたが、それは杞憂でした。会議が開催された10月12日は、ちょうどワールドカップの予選が終了し、決勝が始まる前の、いわば中休みの時期だったからです。



写真1：スタッド・ド・フランス



写真2：AFNOR

会場のAFNORは、スタジアムのすぐそばでした（写真2）。何も考えずに会場近くのホテルを予約したのですが、2013年にAFNORで開催された第1回全体会議に出席したJS職員から、やや治安の悪い地域だから気をつけるように言われ、出発前は少し不安でした。確かに、安全かと聞かれると「はい」と即答できる雰囲気ではありませんが、とりあえず試合もなく周辺はむしろ閑散としていたため、少なくともスリの心配とは無縁だったと

言えます。

実は、現地に到着してタクシーの運転手さんに聞くまで、サン・ドニはパリ市内だと思いついていました。AFNORの最寄り駅は、高速鉄道RERのスタッド・ド・フランス・サン・ドニですが、ここは、年間利用者数ヨーロッパ最多で、パリの北の玄関口である北駅の隣です。パリ市内まで5～10分で行けることがわかったので、空き時間に市内にある下水道博物館（写真3）を見学することにしました。

パリの下水道と言えば、「レ・ミゼラブル」を思い出しますが、作者のヴィクトル・ユゴーは「パリの下には下水道というもうひとつのパリがある」と言って、下水道について詳しく述べています。せっかくなので、パリの足元に広がる2600kmネットワークの一端をのぞいてみたいと思いました。

パリ下水道博物館は、エッフェル塔からオルセー美術館に向かう、セヌ川南岸沿いにあります。地下の施設のせいか外観は控えめで、うっかり通り過ぎてしまいそうな、たまたまです。

入口で聞くと説明表示は全てフランス語だというので（この理由については後ほど）、英語の解説を聞くためのヘッドセットを借りました。



写真3：下水道博物館

同行者によると、ここはセヌ川を横断する合流管から下水をポンプアップするためのポンプ場の一部を改造し、外部公開しているものだそうです。博物館はゆっくり回っても1時間ほどで見終わりましたが、入口の受付に一人男性がいる以外は、内部にスタッフらしき人は見当たりませんでした。

観光客も少なく、間違っても水路に落ちて気づく人もいないかもしれません。HPに様々な注意書き（妊婦や5歳以下の子ども、閉所恐怖症の人にはお勧めしません、柵は乗り越えてはいけません、など）はありましたが、基本的に全ては自己責任なのだと思いました。

筆者は今回3度目のフランスで、最初に訪れてからは何十年も経っていますが、パリはある意味ほとんど変わっていませんでした。街の風景もそうですが、これほど観光客が多いにもかかわらず、英語表示が極端に少ないのもその一例です。

ちょっと不思議に思って調べてみると、フランスにはいわゆるトゥーボン法という、フランス語の使用に関する法律があることがわかりました（知らなかったのは私だけかもしれませんが）。1994年に制定されたこの法律は、公共性の高い分野にフランス語の使用を広く義務づけるとともに、外来語の使用を規制するもので、違反に対する罰金も高額だそうです。

法律の制定には、フランス語の擁護に熱心な国民性もあると思いますが、外来語、特に英語に対する脅威や、フランス語の国際的な地位に対する危機感が根底にあるということです。

この法律の是非はともかくとして、ケタ外れに外国語の導入が多く、英語を母国語とする人には決して通じない和製英語の氾濫する国に暮らす筆者には、このような政府主導の言語政策は驚きでしかありません。しかし言語を含む自国文化をかたくなまでに守ろうとする姿勢が、街の景観を維持する一端を担っているのかもしれないと思うと、否定する気持ちにはなりません。

今回駆け足のフランス出張でしたが、数々の出会いもあり、フランスという国について小さいけれど新たな発見もありました。

今後はトゥーボン法も含め、高度情報化社会における言語の行方についても、興味を持って見守っていきたいと思います。

*1) 電気および電子技術分野における標準化は国際電気標準会議（IEC）が担っている。